
モンスターハンター～ブリーダーハンターとモンスター達の生活～

フォック・リザハート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター〜ブリーダーハンターとモンスター達の生活〜

【Nコード】

N7302J

【作者名】

フォック・リザハート

【あらすじ】

ポツケ村のある大きな家には一人ハンターが住んでいるが

実はなんと！？モンスターまで住んでいた

主人公フォケとその仲間達とモンスター達が描く

モンスター愛と絆の物語

プロローグ ある村の（前書き）

初のモンハン単独の作品です。

ではどうぞ

プロローグ ある村の

ここは雪山の近くにある村、ポツケ村

ここには集会所や農場などがあり、温泉がある村だ

そしてその村にある大きな家が建っていた

ここにはあるハンターが住んでいるが、

実はハンターだけじゃなく

なんと！モンスターまで住んでいた

そのハンターの名はフォケ・ドラゴニス

彼は王宮書士隊の隊長でさらにハンターで集めたグループ、チーム・ドラゴニツクのリーダーを務めている。

そしてもう一つ、

彼には別名がある

それは・・・

モンスターブリーダー

それが彼のもう一つの名である

そしてフォケの物語は

今、始まろうとしている

第1話 フォケと仲間達（前書き）

さて第1話になります。

ではどうぞ！

第1話 フォケと仲間達

ここはポツケ村

雪が降り積もる雪山の村である

その村のある大きな家

そこには村つきのハンターとモンスターが住んでいる

なぜモンスターと住んでいるのかって

それはそのハンターがブリーダーハンターと呼ばれる凄腕のハンターだからだ

それじゃあそのハンターの様子を見てみよう

・・・

???? 「う・・・うーん・・・」

ベットに寝ているのはこの家のハンター

髪は赤色で、髪型はレウスレイヤー、インナーは少し青っぽい色のマカライトブルー

彼の名はフォケ、

あるグループのリーダーである

すると足音が聞こえる

????? 「フォケく起きてよ」

声の主は緑の鱗を持つ飛竜だった

陸の女王と恐れ呼ばれる雌火竜リオレイアだ

フォケ「んあ?・・・おはようレイナ」

と、レイナと呼ばれるリオレイアに挨拶する

レイナ「もうテオス達も起きてるから行こう」

フォケ「ああそうだな」

と二人（一人と一匹）は移動した

・・・

アイルー食堂

ここはアイルー食堂

そこにはモンスター達がいた

一匹は体色は赤でまるで獅子のような顔をして、赤い翼のモンスター

一匹は赤のモンスターとは正反対に体色は青で翼も鮮やかな青色を

したモンスター

他に、二足歩行をした猫が8匹

それぞれ体色が違う

そのうち3匹は頭の緑色のかぶとをかぶっていて

残りの5匹は板前みたいな服を着ていた

そんななか

先ほどの二人がやってきた

フォケ「おはようみんな！」

と、フォケは挨拶した

????? 「おはようフォケ」

と先ほどの赤いモンスターが挨拶する

彼は古龍種と呼ばれる種族で、炎王龍テオ・テスカトル、名はテオス

????? 「おはようございます、フォケ」

と、もう一方の青いモンスターが挨拶する

声は女性のような声だ

彼女はテオスと同じく古龍種で、炎妃龍ナナ・テスカトリ、名はアイナ

????? 「「おはようニャ!ご主人」」

8匹の猫達が挨拶する

彼らはアイルーと呼ばれる種族で

そのうち3匹のかぶとをかぶっているアイルーはハンターをサポートするオトモアイルーと呼ばれるアイルー達

残りの5匹はハンターのために料理を作るキッチンアイルーと呼ばれるアイルー達だ

フォケ「そんじゃ早速朝食だ」

こうして1日が始まる

第1話 フォケと仲間達（後書き）

さて、この物語の主人公、フォケに来てもらいました！

フォケ「フォケだ、よろしくな！」

まあ彼は俺のモンハンキャラの分身キャラなので

フォケ「まっ俺はそれでもがんばってるんだがな」

そうだね、それではこれからもよろしくお願いします。

第2話 ある場所にいるのは（前書き）

フォケ「このタイトルは？」

今回はフォケ視点じゃないけどちゃんと君の出番を出すから

フォケ「そうか・・・じゃあどうぞ」

第2話 ある場所にいるのは

・
・
・
・
・

こ・
こ・
こ・
こ・
こ・
こ・

・
・
・
・
・

ある一匹のモンスターが目を覚めた

赤い鱗におおわれた赤き飛竜

空の王者と呼ばれる飛竜リオレウス

なぜか様子がおかしい

リオレウス「・・・なんだ・・・体が大きく感じるが・・・」

ここは森丘

その水のみ場にリオレウスはいた

リオレウスは水のみ場に顔を見る

リオレウス「何じゃこりゃあああああああああああああ！！！！！！」

水に映っているのは龍の姿だった

リオレウス「ガ・・・ガオ（なんで俺がリオレウスに）」

でもどうしてなんだ、なんで俺がリオレウスなんかに

とにかく飛べるかわからないが飛んでみるか

リオレウスは翼を羽ばたく

できた！

とにかくハンターに襲われたらどうしよう

けど、俺が人間だった記憶もない

一体どういうことだ？

・・・

フォケ「今日は森丘素材ツアーだ、行くぞ！セナ、レイナ」

レイナ「OK！フォケ」

セナ「はいニャ！」

と、レイナと、オトモでありフォケの最高のパートナーセナが言う

そんな彼らが

出会うことになるとは

第2話 ある場所にいるのは（後書き）

フォケ「なんかポケダンのようだな」

そうしないとなんか展開が進まないと思って

フォケ「まあいいや、とりあえずどうなるかだな、次回は？」

次回は森丘で出会いが

フォケ「モンスターブリーダーとしてそこは見ておかなきゃな」

冷静だね、君は

フォケ「冷静になることも大事だしな」

第3話 出会い・・・そして・・・(前書き)

フォケ「このタイトルは？」

さあ、ついに出会いですよ

フォケ「それはそうだが、あのリオレウスだろ？」

まあ細かいことは気にしないで

フォケ「そうか、ではどうぞ」

第3話 出会い・・・そして・・・

森丘

そこに赤い鎧に包まれた青年

深青の獣人のネコ

そして緑の鱗に覆われた雌の飛竜

レックスXシリーズと呼ばれる防具を着てやってきたフォケと

どんぐりメールにたるのハンマーを持っているオトモアイルー、セナ

そしてリオレイアのレイナ

3人（一人と二匹）はここ森丘へとやってきていた

ただいまエリア3にいて、休憩をとっている

フォケ「ふう〜」

レックスXヘルムを脱ぎ、ヘルムを横に置いたフォケ

レイナ「ねえ、どれくらい集まった？」

と、レイナ

どうやらなにかを探していた様子

フォケ「ぜんぜん、厳選キノコはうまく見つからないな」

セナ「こっちもニャ」

どうやら厳選キノコを採っていたらしい

厳選キノコ

特産キノコよりかなり豪華なキノコで

ポッケポイントの生産アイテムである

フォケ「とりあえずそろそろ行くか？」

レイナ「そうね」

セナ「わかったニャ」

3人は出発すると

フォケ「ん？」

フォケがなにかを感じた

レイナ「どうしたの？フォケ」

と、レイナが聞く

フォケ「なにか感じる」

レイナ「えっ？」

すると何かが空を飛んで降りてきた

フォケ「隠れるぞ」

と、3人は岩肌に隠れた

その何かは降りてきた

赤い翼にしっぽの先端はとがっている

空の王者リオレウス

レイナ「ねえ？なんでリオレウスが？」

フォケ「わからない、けどたしかイャンクック亜種が出るはずだが・
・おかしい、それに」

レイナ「それに？」

フォケ「このリオレウスなんだかおかしいと思わないか？」

レイナ「えっ!？」

レイナはリオレウスを見た

リオレウスはなんだかおどおどしている

セナ「なんかおどおどしてるニャ」

フォケ「これはなにかあるな・・・たしかめるぞ」

と、フォケはリオレウスに向かって走り出す

レイナ「あっ！？フォケ待って！？」

セナ「ご主人！？」

あとの二匹もフォケについていく

・・・

リオレウス『どうしよう、何処に行っても危険ばかりだ』

と、おどおどしているリオレウス

ここは森丘エリア3

どうやら他の場所に行ったのだが、どれも危険だった

リオレウス『こんな所にハンターがいたら俺、殺されちゃう』

すると

????「おーい！！！」

リオレウス『！？』

すると一人のハンターと十アイルーとリオレイアがまっすぐコチラに走って来たではないか

リオレウス『ぎゃああああああああああ！！？？！』

するとリオレウスは空に飛ぶが！？

ピカ

リオレウス 『ぎゃあああああああ！！？？ 目が！？ 目があああ
ああ！？？』

そのまま地面へ急降下

グキッ！

と嫌な音が

リオレウス『ぎゃあああああ!?!?痛手ええええええええええええ!!?!?』

と、咆哮するリオレウス

やっと閃光玉の効果が切れた

リオレウス
『!？』

今日の前にハンターとアイルーとリオレイアが

一瞬リオレウスは

やられる！

覚悟を決めて目を瞑った（つむった）

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・あれ？

そこには治療するハンター、フォケの姿が

フォケ「大丈夫か？ごめんな、足を骨折しちゃって」

リオレウス『えっ！？』

これにリオレウスが驚く

リオレウス『あんた・・・ハンターだろ？なんで？』

と、リオレウスがフォケに聞く

フォケ「誰かを助けるために、理由なんているか？お前はなんか感じるから助けた、それだけだ」

と、フォケは言った

レイナ「もう、あんたなんで逃げるのよ！モンスターのくせに！」

と、レイナ

リオレウス「えっ!?!? そんなこと・・・いわ・・・れ・・・!?!?」

その時気づいた

リオレウス『リオレイアがしゃべってるーーーーー!?!?!?』

と、驚きの表情

レイナ「なによ、しゃべって悪い!」

と、怒るレイナ

フォケ「落ち着けよレイナ、まずはコイツに理由を聞かなきゃ話にならないだろ?」

と、フォケ

レイナ「わかったわ、フォケ」

と、おとなしくなるレイナ

フォケ「さて」

フォケはリオレウスに向ける

フォケ「なんで逃げるんだ? 普通のモンスターなら襲う(おそう)はずだぜ? それになんておどおどしてるんだ?」

と、フォケは言った

リオレウス『実は・・・』

リオレウスはフォケにこれまでのことを話した

自分が人間だったこと

別の世界に来て目覚めたらリオレウスになってたこと

・・・

ひとまずおき

フォケ「なるほどな・・・よしっ！俺の所に行くか？」

リオレウス『えっ！？』

と、驚くリオレウス

フォケ「俺の所は、モンスターがいるから大丈夫だし、村長に事情を説明すればなんとかなる」

レイナ「それにフォケは私たちのことをちゃんと見てるのよ、だからしばらくはフォケのところについていったほうがいいわ、そこならあなたが人間になった原因とかを調べられるし、いいでしょ？」

と、レイナ

リオレウス『（このフォケというハンター・・・この俺を・・・）』

すると、リオレウスは

リオレウス『わかった・・・あんた達についていくよ』

と、しょうだく承諾

フォケ「決まりだな・・・ところで・・・お前、名前は？」

リオレウス『あっ』

そうこのリオレウスは元々人間

名前はあるはずだ

リオレウス『それが・・・名前がわからないんだ』

と言う

フォケ「そうか・・・じゃあリーガはどうだ？」

フォケは名前を付けた

リオレウス『うん、しばらくはこの名前で使わせてもらっておくよ』

と、名前まで付けてもらったリオレウス、元人間リーガ

彼らの出会いは

何かを呼ぶのか？

第3話 出会い・・・そして・・・（後書き）

フォケ「やっと終わったな」

はい！というわけで、リーガ君に来てもらいました♪

リーガ「俺はリーガっていうんだ、よろしくな」

足は大丈夫？

リーガ「うん、フォケが治療してくれなかったら動けなかった」

フォケ「さすが、秘薬といにしえの秘薬だ」

そりゃそうだw

リーガ「苦かったし」

秘薬だからねw

フォケ「さて、次回は？」

うゝん次回はリーガのフォケ宅への入所にあのモンスターも登場だよ

フォケ「誰だ？」

君と俺が苦勞して討伐したあのモンスターだよ

フォケ「ああっ！あいつか」

リーガ「誰なんだ？」

次回まで待って

第4話 案内と帰ってきた者（前書き）

フォケ「久しぶりの更新だな」

まあこっちの方があまりに人気になってきて更新速度が速くなったからね（汗）

フォケ「それで今回は？」

今回はリーガをポケ村に案内と新たに仲間が来ます

フォケ「来ます？」

それは後ほど♪それではどうぞ

第4話 案内と帰ってきた者

なんとか4人（一人と三匹）はポツケ村に帰ってきた

フォケ「とりあえず案内しよう」

フォケは元人間リーガを村の案内をすることにした

……

フォケ「オババ、新しい仲間ができた、住民票を頼む」

オババ「ヨイヨイ、わかったよフォケ」

まずは大マカライトの前にいるオババこと村長とネコートさん所だ

ネコートは獣人族のアイルーで赤いコートを着ている

ネコート「結局またなにかでつれてきたんだろ（汗）」

と、呆れたように言うネコート

フォケ「アハハ（汗）俺ってなにかついてるんのか（汗）」

と言うフォケ

オババ「そんじゃよろしくね♪リーガ」

と、のんきな口調で言うオババ

リーガ『はい、よろしくお願いします』

リーガは挨拶する

……

ポケ農場

フォケ「ここはポケ農場だ」

続いてやってきたのはポケ農場

ここはその通り農場だ

フォケ「おーい！トレニャー！次の目的地に行ってくれ！」

????「ハイニャー！」

と、答えたのは黄色のヘルメットに黒いサングラスをかけたアイル
ーだ

彼の名はトレニャーと言う

集会所のトレジィの一番弟子なのだ

もちろん何処かに行くよう頼めば、アイテムなどをもらえる

その代わりポケポイントというポイントを払わなければならない

トレニャーはさっそうと船に乗って何処かへ行った

フォケ達はキノコなど、その他を収穫した

……

ここはポツケ村の上空

????? 「ふう〜やつと帰ってきたよ、フォケは何処かな〜」

上空に飛んでいるのは鳥だ

しかも大きい

ラッパのようなクチバシに色鮮やかな体色、両翼には石がついている

さいちよう
彩鳥クルペッコ

彼もモンスターなのだが、どうやらフォケと関係があるらしい

クルペッコ 「あっ！いた！」

クルペッコはフォケを見つけたため、そのまま急降下して行った

……

フォケ 「とりあえずは以上だ」

レイナ 「どう？ポツケ村は？」

レイナがリーガに聞いてくる

リーガ『うん、結構いい村だな、けど普通はモンスターでもここま
で仲良くできるなんて、すごいな〜フォケは』

関心したリーガ

フォケ「いや、俺は色々と肩書きを持ってるからここでモンスターの討伐と救助とかをしてるんだ」

クルペッコ「それにフォケは元ギルドナイトのドラゴン隊の隊長をしてたんだ」

いつのまにかクルペッコが話の輪に入っていた

しかもしゃべっていた

フォケ「おお！クルコか♪いつ帰って来たんだ？」

クルコ「はい！今帰ってきた所だよ♪」

どうやらクルコはフォケの仲間のようだ

フォケ「どうだ？モカの方は？」

とクルコに言う

クルコは別の大陸にあるモカの村に滞在していた

もちろんクルコの故郷である

なぜクルペッコが仲間になったのか

それはまた別の話になるだろう

クルコ「うん♪久しぶりの故郷はよかったよ♪」

フォケ「そうか」

と、納得するフォケ

クルコ「所で？このリオレウスは？」

リーガをしめす

フォケ「ああ、コイツは元人間で今はリオレウスのリーガだ」

リーガ『リーガっていいいます』

リーガはクルコに挨拶した

クルコ「へえ〜いい名前だね♪」

フォケ「元は俺がつけたからな」

クルコはようきな感じに言う

フォケ「そんじゃ中に入るか、ちなみにモンスターでも入れるから
安心しろ」

どうやらフォケの家は大型モンスターでも入れるようにしてあるようだ（アカムとウカムぐらいはは入れない）

フォケ「そんじゃ入るぞ」

こうして5人は家に入っていた

第4話 案内と帰ってきた者（後書き）

リーガ「なんかモンスターを受けてくれるなんて…って俺！？しゃべってる」

後書きはしゃべれるようになるけど、そのうち話すようにするよ

リーガ「ありがたいな、でもモンスターを受け入れてくれるなんて思ってもみなかった」

それは俺がモンスターと共存みたいなものを望むような感じで作っただもん♪

リーガ「だからこんなに中がいんだ、けどフォケってすごいな（汗）」

その辺はそのうちね

クルコ「作者さん、次回は？」

次回は家の方になるかな、まあまだメンバー紹介終わってないから

リーガ「そうだな（汗）」

クルコ「楽しみ♪」

第5話 ようこそ（前書き）

中々いいのが思い浮かばないな

フォケ「まあでもあわてるな、俺たちはそれで困難を乗り越えたんだろ？」

もちろん！

フォケ「そんじゃ第5話をどうぞ」

第5話 ようこそ

フォケ達は家に入った

リーガ『うわあゝすげえゝなゝ』

玄関は広く広々としていた

フォケ「どうだ？ いいだろ？」

と、フォケはリーガに言った

リーガ『いやすごいな、フォケって何者？』

フォケ「いや（汗）何者っていつでも俺はハンターだからな」

何者っていわれてもフォケはハンターなのだから

リーガ『そんじゃあ次案内してくれ』

リーガに言われ次を案内する

……

フォケの部屋

リーガ『ここがフォケの…って！？』

リーガは驚いていた

なぜかというと

リーガ『なんでモンハンの世界に電話とかがあるんだ!?!?』

なんと電話があった

それに

リーガ『なんか俺のいる世界と変わらない感じが(汗)』

フォケ『いいじゃないか別に♪』

と、とうの本人は笑顔

それにレイナは

レイナ『あら別にいいじゃない♪』

こっちも笑顔でいった

リーガ『あんたら一体なんなんだ(汗)』

リーガはつつこむ

……

アイルーキッチン大食堂

そこはモンスターが入れるくらいの大きさでウカムとアカムとラオ
シャンロンの全長くらいの食堂だった

そこには

テオス「おおフォケか」

フォケ「ただいま、テオス」

リーガ『えっ！？なんでテオがいんの！？』

リーガは驚く

そりゃあテオがいるのはなぜか違和感があるが

クルコ「ただいんです♪」

アイナ「クルコまで帰ってたのね」

アイナまで出てきた

リーガ『うっそ〜ん！？なんでナナまでいるの〜！？』

リーガはつつこみきれない

テオス「そういえばリオレウスだがなんなんだ？」

とテオスは言った

フォケ「ああ、こいつは元人間でリーガっていうんだ、今日からここで世話することになった、二人とも、仲良くな」

とうのフォケはなぜか怖がらない

リーガ『えゝ（汗）マジなんですかフォケさん（汗）なんで古龍なっているんですか（汗）しかも二匹』

と、リーガは驚いて冷や汗をかいていた

テオス「なにも驚くことはない、私はテオス、テオ・テスカトルだ」

アイナ「私はアイナ、主人のテオスの妻で、ナナ・テスカトリです」

二匹は自己紹介した

リーガ『あつ、これはどうも』

リーガは首を下げた

……

その後色々案内されて

フォケ「さて、それぞれ案内したがどうだ？」

と、リーガに聞く

リーガ『ありえないもんだった（汗）』

フォケ「ははは、まあ慣れればそのうち大丈夫だ」

とフォケは言った

リーガ『ははは（汗）』

すると

♪♪

何処からかメロディーが流れていた

するとフォケはなにか取り出した

リーガ『（ええええええええええっ！！？！？）』

なんとそれは携帯電話だった

リーガ『（なんで携帯電話がこの世界にあるんだ！！？！？）』

もはや仰天するばかりであった

電話の相手は誰なのか

ピッ

電話を切ったフォケ

リーガ『なあ？誰と話してたんだ』

心でつつこんでたため会話が聞き取れなかったらしい

フォケ「ああ、俺が前に別の世界で知り合った奴からなんだ」

といった

ちなみにそれはバトル部の部長のあいつからだった

詳しくはバトル部で

リーガ『そうなんだ（汗）』

その日、リーガはありえない家にこれから生活することに

はたして、彼は人間へと戻れるのだろうか？

はたまたそのままなのか？

それはこの物語しだい

第5話 ようこそ（後書き）

リーガ「作者（汗）なんかありえないんですけど（汗）これ本当にモンハンなんですか（汗）」

モンハンだよ、まあ常識はずれみたいな感じだけど、これから色々物語をうまくできるようにしないとね

リーガ「それで次回はどんなだ？」

まだ決まってないけど、色々アイデアが浮かぶまでかな？

リーガ「作者（汗）それじゃあそれまでは更新がないってことか（汗）」

まあそうなるかな？それまで待っててね♪↑逃走

リーガ「逃げやがった!？」

第6話 下位クエスト 飛竜の卵をGETせよ(前書き)

フォケ「なんだ(汗) このタイトルは(汗)」

何って下位クエだよ？

フォケ「なにかありそうな予感だが(汗)」

ふふふ(黒)

フォケ「(やっぱり(汗))」

第6話 下位クエスト 飛竜の卵をGETせよ

それから1週間後

フォケ「さて、まだまだだな」

フォケは武器を使いこなすために武器を使っている

今チャレンジしている武器はガンランス

必殺の龍撃砲で相手に大きなダメージを与え、突きと砲撃で攻撃、かなり難しい武器なのだ

武器には使い方にもよるが難しさもある

フォケが今使える武器は得意の太刀に弓、それから双剣だ

片手剣は慣れてはいるがあまり使わないため対象使用武器からはずれている

大剣もあるがいまだに使いこなせていない

大剣は初心者でも扱える武器だが、一撃が大きいため、中々使いこなすのが難しい

他にランスや狩猟笛は上級者が扱える武器もまだこなせていない

特に狩猟笛は旋律により効果が現れる

旋律は覚えるのも難しいハンマーをランクアップした武器なのだから

ハンマーも初心者にはうってつけだが、あまり使わない

ライトやベビーもそのうち使いこなすことにはなるだろう

フォケが使ってるガンランスは、黒いランスと盾だ

これは迅竜ナルガクルガの素材で作られたガンランス、やじゅうそうざん夜銃槍「残月」だ

色々と下位のクエストで使っている

そしてフォケが今来ている防具は岩のようなゴツゴツした白い防具だ

鎧竜グラビモスから作られた防具、グラビドXシリーズだ

防具はまさにグラビモスのような硬い鎧のようにこのグラビドXシリーズも硬い鎧だ

ガード性能にガード強化を備わっている

レイナ「がんばってるね、フォケは」

フォケ「まあ使いこなすの難しいからなくガンランスは」

そんなとき

リーガ「フォケく手紙が来てるぞ」

リーガの声だ

リーガは普通に人語を話していた

ここ1週間リーガは普通に話せるようにレイナに教えてもらった

厳しい人語の話を特訓して1週間

まだなれないが少しずつ人語が話せるようにはなった

リーガ『村長からなんだけど』

フォケ「村長から？」

フォケは手紙を読んでみた

フォケへ

お前さんにクエストが入った、依頼は飛竜の卵を取ってきて欲しいのじゃ、場所は密林じゃ、それじゃあがんばるのじゃ

村長

採取クエスト

飛竜の卵を取ってきて欲しい

報酬…3000Z

契約金…500Z

フォケ「とりあえず受けるか」

フォケは準備した

…

ここは密林

森に囲まれたフィールドの砂浜にフォケ達がいた

フォケはそのままの装備（夜銃槍とグラビドX）で来た

他にレイナとリーガまで来ていた

飛竜の卵はレイナが詳しい

もちろんレイナは結婚していない

生まれた時に自分の母と父に教えられて来たのだから

リーガ『とりあえず行こうか』

レイナ「行きましょう」

フォケ「ああ」

3人は飛竜の卵のあるエリア7へと移動した

……

エリア7

フォケ「あった」

フォケは早速飛竜の卵を見つけた

レイナ「それじゃあ私とリーガが卵を守るから」

フォケ「頼んだ」

フォケ達は卵を落とさないように慎重に進んだ

……

エリア3

ここは特にガミザミなどに注意しなければならないエリアだ

レイナ「前方にガミザミがいるわね」

フォケ達の前方には殻に身を包んだ赤い蟹^{かに}がいた

あれがガミザミだ

レイナ「ここは私のブレスで」

レイナは首を上上げてそこから火球のブレスをはいた

それを3発

3発はガミザミにあたりガミザミはボタンと倒れた

あとは黄色の昆虫、ランゴスタが飛んでいるが

二匹に守っているため手出しができない

リーガ『こうすればランゴスタもフォケを刺さないな』

ランゴスタには麻痺を持つ針があって刺されると麻痺を起こしてしまうので注意が必要なのだ

こうして順調にフォケ達はBC^{ベースキャンプ}までなんとか卵を運んだ

……

再びエリア7へと戻ったフォケ達は次の卵を運ぶが

フォケ「ん？この卵？やけに白いようだが？」

フォケが持っている今の卵はなんと白の卵だ

レイナ「こんな卵なんて初めてよ」

レイナは見るのが初めてだ

リーガ『取り合えず運んでみるしかないね』

フォケ「そうだな、よし！運ぶぞ」

3人は白い卵を運んだ

……

エリア1

レイナ「ランポスね」

リーガ『これは数が多いな』

ランポス、鳥竜種のモンスターで青い鱗に皮が特徴のモンスターだ

レイナ「これは厄介ね、リーガ、ブレスで追い払いましょ」

リーガ「分かった」

リーガはそういうと

リーガ「ブレス！」

首を上げてそこから下げてブレスを放った

レイナ「こっちも3連ブレスよ」

レイナは3連ブレスをはいた

なんとかランポスは地に伏せた

フォケ「それじゃあいくか」

フォケが歩こうとしたその時！？

ランポス「ギアアギアア！」

なんと一匹のランポスがフォケに向かって襲い掛かってきた

レイナ「フォケ！」

フォケ「！？」

なんと飛び跳ねて襲い掛かってきた

フォケ「（ぶつかる！？）」

ランポスがフォケの後数センチ前まで来たその時

ピキッ

なにか割れる音がした

フォケはランポスにぶつかりそのまま卵とともに転がってしまった
卵はなぜか割れずにそのままコロコロと転がっていった

レイナはブレスでランポスを仕留めた

卵はそのまま壁に転がって止まった

フォケ「くっ、油断した」

レイナ「大丈夫、フォケ？」

フォケ「ああ、なんとか、グラビドの防御がなかったら危なかった」

あまりダメージはなかったようだ

リーガ『それより卵』

フォケ「なっ！？卵が」

フォケ達は卵に駆けつける

幸い卵は無事だ

卵はみるみるうちにヒビを増やした

そして

フォケ「孵った（かえった）！？」

なんと卵が孵ってしまった

生まれたのは見たことのないモンスターだ

体はミラルーツのような白い体色に赤い天使の羽根をイメージしたような模様がおなかについていた、目は愛くるしく、顔も丸くてかわいく、二本の角が立っていたしかも角が赤い

翼膜は白く表は白く、裏は赤い

????「キューイ♪」

かわいくないていた

レイナ「かわいい♪」

レイナはその赤ちゃんドラゴンを見て思わずキュンとした

フォケ「俺を見ているが（汗）」

リーガ「そうだな」

レイナ「もしかして…はり込み見たいね」

はり込みとは

卵から孵った赤ちゃんは一番最初に見た者を親としてしまうものだ

フォケ「とりあえずなんとかしないとな」

こうしてフォケに新しい仲間が出来たとき

第6話 下位クエスト 飛竜の卵をGETせよ（後書き）

フォケ「なんだ！？あの龍は！？」

ふふふ（黒）

フォケ「作者（汗）これはどういうことか説明しろ」

これはね、実は俺のオリジナルの龍だよ♪

フォケ「オリジナル？」

ふふふ、次回でその龍の名前と種族名がわかるよ

フォケ「なんか究極のところの零みたいだな（汗）」

うーんでもこれで二匹目だよ（黒）かわいいキャラを作るの

フォケ「オリジナルまで作るとは（汗）」

第7話 聖炎龍 ブレイブラス（前書き）

フォケ 「大丈夫か？ 作者」

大丈夫、俺もがんばらないと

フォケ 「無理すんなよ？」

うん、ではどうぞ

第7話 聖炎龍 ブレイブラス

前回、謎の白い卵を発見して、持ち帰ろうとしたがランポスにやられて卵を落としてしまったが!?

卵は生まれてしまい、フォケは仕方がなく飼うことにした

……

フォケ「うーん、このモンスターが何者なのかわからないな」

????? 「キューイ？」

赤ちゃんドラゴンは首をかしげる

レイナ「フォケく色々と資料持って来たよ」

フォケ「ああ、そこにおいといてくれ」

レイナは持ってきた資料をおいた

リーガ『それにしてもこの龍見たことないな?』

リーガも首をかしげる

フォケ「何処だ…」

すると

フォケ「あつた！これだ！」

フォケは何か発見した

リーガ『見つかったのか？』

フォケ「ああ！こいつは聖炎龍^{せいえんりゅう}ブレイブラスという名前だ、しかも古龍だ」

古龍は未知の生物でテオスとアイナも古龍に分類されている

フォケ「こいつは聖なる力があり、善意があるものもしくは正の気がある者にしか認められない貴重な龍なんだ」

どうやらこの赤ちゃんドラゴンはブレイブラスと呼ばれる古龍らしい

クルコ「それにしてもかわいいね♪」

フォケ「まさか俺になつくとは（汗）」

ブレイブラスの赤ちゃんはフォケになついていた

リーガ『でもなんでフォケなんだ？』

そう、なぜフォケなのかだ

フォケはハンターだ

善意や正の気なんてない

なぜかというと

ハンターはモンスターを倒す目的などもあり

悪意はないが戦いでのが見える

けどなぜフォケなのかは

それは別になるだろう

フォケ「それより名前だな」

そう、この子の名前だ

ちゃんと住民票には登録はしてある

あとは名前だけになった

クルコ「うーん」

みんな考える

リーガ『なあどうせならブレラスはどうかかな?』

リーガは名前を提案した

フォケ「そうだな…それにするか」

レイナ「そうね♪たまにはやるわね♪」

とリーガに囁むレイナ

リーガ『イテテ（泣）やめてくれ（泣）』

全員「あはははは」

全員が笑う

こうして

ブレラスを仲間にしたフォケ達

謎が包み込むこの龍

はたして

第7話 聖炎龍 ブレイブラス（後書き）

ブレラス「キュー♪」

ん？ブレラスどうした？

ブレラス「キューキュー」

何々？いつになったらしゃべれるのって？

ブレラス「キュー」（コクコク）

うーん、そんなすぐにはできないから待っててね、それとチョコでも

ブレラス「キュー♪」↑喜んでる

そうか♪そんなにチョコが好きなんだね♪

第8話 新たな地へ

それから1ヶ月後

ブレラスも成長して何事もなく彼等は過ごしていた

ブレラス「フォケ」

ブレラスは段々と喋るようになった

さらに驚いたのはブレイブラスにはある異名がある

それは

異次元の旅人

そう書いてあった

なんのことはわからないが、作者みたいなことだとは思う（汗）

とりあえずはおいといて

フォケ「どうした？ブレラス？」

ブレラス「手紙だよ」

ブレラスの手には手紙が

フォケ「ありがとな」

フォケは手紙を受け取った

フォケ「誰からだ……ギルドからか」

ブレラス「早速読んでみよう」

フォケは手紙を読んだ

拝啓、フォケ・ドラゴニス様

あなたをユクモ村への移転を決定しました、実は最近ちまたで暴れている雷狼竜ジンオウガを討伐およびあなたのブリーダーとしての更正をしてもらいたいです、こちらでの活躍を期待しています

ハンターズギルド

フォケ「これはユクモ村への移転だな」

ユクモ村

そこは温泉の名所としても知られる村でポツケ村からはかなり遠いのだ

もちろんモカ村の近くの孤島などもあるため行ける

ブレラス「そのユクモ村に行くの？」

ブレラスは言う

フォケ「ああ、今日は色々忙しくなるな」

と、苦笑いしながらフォケは言う

……

夜

フォケ「えー2日後にポツケ村を出発する、ここではテオス・アイナ、ここは任せる、いいな」

テオス「気をつけるんだぞ」

アイナ「とても強いと聞きましたし」

フォケ「それに……俺の狩り魂が燃えてきたからな……がんばらねえとな」

とmフォケは笑顔になる

リーガ「俺も行くの（汗）」

レイナ「だってリーガは人間からリオレウスになった理由がわからないじゃない？」

たしかに

ここに来てからまだリーガがリオレウスになった理由がわからない
リーガ「そうだな、ここで立ち止まったら進まないしな」

そう、前を向くことだ

フォケ「それじゃあ今夜はパーツと行くぞ!! 乾杯!!」

全員『乾杯!!』

全員は深夜まで騒いだ

……

2日後

ポッケ村には全員が集まる

フォケ「俺はユクモ村に行く、後は頼んだぜテオス、アイナ」

テオス「がんばってくるんだぞ」

アイナ「ポッケ村は私達が守ります、フォケも気をつけて」

テオスとアイナはフォケにお別れの挨拶する

村長「気をつけて行くんじゃないぞ」

フォケ「わかってるオババ、後は別のハンターに任せる、まあテオ

スとアイナ、それに他のキッチンアイルーもだけどな」

キッチンアイルー達「ダンナさん！！いつてらっしゅい！！」

キッチンアイルー達はフォケにお別れの挨拶をする

レイナ「行きましょう」

フォケ「ああ」

竜車に乗り、フォケはポツケ村を出た

みんなは涙して、手を振る

フォケ「行くぞ！！新天地へ！！」

フォケ達はユクモ村へと向かった

第8話 新たな地へ（後書き）

久しぶりだからかなりグダグダになっちゃった（汗）

リーガ「次は3rdの舞台になるんだな」

だけど次回は初心にフォケが戻ります

フォケ「初心に帰ることも基本だからな」

まあサトシがピカチュウ一匹になったように新たな気持ちでスタートいたします

フォケ「応援してくれよ」

第9話 ユクモ村へ新たなる狩りへ（前書き）

ついに3rdへ！

フォケ「ついにか」

今回は短いです

ではどうぞ

第9話 ユクモ村へ新たなる狩りへ

ここは溪流

その広大な崖の所に、ユクモ村という温泉で有名な村があった

そんなところを一人のハンターがガーグアという鳥が竜車を走らせている

乗っているのはかさを被ったアイルー、そしてかさで隠して座っている男がいた

フォケ「ふう〜もうすぐだな」

そう、ブリーダーハンター、フォケである

そしてもう一匹、白くて小さい龍がいた

パートナーの聖炎龍ブレイブラスのブレラスだ

アイルー「そうニャ、もうすぐですぜだんな」

ブレラス「わあ〜今度はどんなどころなのか楽しみだね〜♪」

彼等はユクモ村へと急いでいた

ちなみに他のメンバーと別々に別れて、このユクモ村へと合流という感じだ

フォケは崖に落ちた

しかし

バスッ

アイルー「ふう〜危なかったニヤ」

ブレラス「大丈夫フォケ！」

フォケ「ああ、助かった」

竜車がしつかりとフォケを乗せたので、怪我がなくてすんだ

……

ユクモ村入口

フォケ「ありがとな、ほら」

フォケはマタタビをアイルーにあげた

マタタビはアイルー族の好物の物だ

アイルー「ありがとうニヤ、じゃあだんな、達者でニヤ」

フォケ「ああ」

竜車が去っていった

その後から

????? 「フォケーーーーー!!!!!!!!!!」

緑の鱗に龍の顔のモンスターが降りてきた

陸の女王、リオレイアだ

フォケ「レイナ!!」

そう、フォケの仲間であるレイナだ

そしてもう一匹も

????? 「ふう〜やっぱ空を飛べていいな」

レイラ「リーガもなれてきたのよ」

そう、彼は元は人間だったモンスター

空の王者リオレウス

名はリーガである

リーガ「なんとかついたね」

レイナ「さて、早く温泉に入りたいわ♪」

レイナは温泉目的だ

フォケ「俺も、あるモンスターに出くわしたから汚れたな」

見るとフォケの服というか防具が汚れていた

レイナ「へえ〜どんなモンスターだったの？」

レイナがフォケに質問した

フォケ「いや、影でよくわからなかった」

ブレラス「見たことないモンスターだったよ」

リーガ「そうだったんだ」

すると

クルコ「お待たせ〜」

そこから彩鳥クルペッコ、クルコが来た

クルコ「ごめんね、遅れて」

フォケ「いやいいんだ、とりあえず入るぞ」

フォケ達は村へと入った

……

村長「ようこそ、ユクモ村へ私がここのユクモ村の村長です」

フォケ「フォケ・ドラゴニスです、よろしく願いします」

フォケはユクモ村の村長に挨拶した

ユクモ村の村長は綺麗な白い肌で、耳がとんがっていて、舞妓^{まいじ}さんが着ているような服を着ていた

彼女は竜人族という者で耳がとんがっているのが特徴で、寿命は長いのだ

フォケは龍の血を引いているが、彼は特別なのだ

その話はまた別の機会となるだろう

フォケ「さて、話は済んだぞ、新しい我が家へと行くぞ！」

みんなは新しい自宅へと向かった

……

レイナ「わあ〜綺麗〜♪」

ほとんどが大きかった

中は広く、レイナ達も通れるようにしてあり、それぞれの部屋が用意されていた

リーガ「ここに俺が人間になったヒントがあると思ったけど……なかったな」

リーガはしょぼんと落ち込んだ

レイナ「まあ慌てないでよ、どうせ来たんだし♪」

レイナは嬉しそうだ

フォケ「それじゃあ温泉に入るぞ」

レイナ「は〜い♪」

ブレラス「わ〜い♪」

リーガ「何がなんだか（汗）」

フォケ達は温泉へと向かった

そして……

フォケの新たな地への狩りが

今始まる！！

第9話 ユクモ村へ新たなる狩りへ（後書き）

ぐだぐだだ（汗）

フォケ「作者しっかりしろよ（汗）」

ごめん、でも次回は新たに仲間になるモンスターが！？

リーガ「いきなり！？」

うん、アイデアが浮かんでね、あるモンスターが

ブレラス「なんだろう？」

ヒントは獣牙族のモンスターです

第10話 大食い熊（前書き）

フォケ「なんだ、このタイトル（汗）」

今回は新たな仲間が

フォケ「この熊って一体？」

見てからのお楽しみ、それから少し書き方を変えます、それではどうぞ

第10話 大食い熊

「とりあえずロイヤルハニーの納品完了っ」と

ユクモシリーズに身を包み、汗を拭うフォケ

「それにしてもあの熊なんだったんだろう？」

と、ブレラスが言う

実は途中、あるモンスターと遭遇してしまったのだ

熊のような姿で、鋭い爪を持つモンスターだ

「たしかになんだったんですニャ？」

そういうのは赤い虎の毛並みのアイルー

どんぐりメイルなどを被っていた

これはオトモアイルーという、狩りのサポートするアイルーだ

実はポッケ村でフォケはオトモアイルーも残していったのだ

今回は新しいオトモとともに狩りに行くことになった

フォケのアイルー、ティガは疑問に思いそう言った

「そうだな、なんだったのか」

何がともあれフォケ・ブレラス・ティガは村へと戻った

……

「アオアシラか……」

フォケは帰ってきてため息をついた

実は帰ってきて、フォケは村長にこのことを言った

どうやらこのモンスターはアオアシラという牙獣種のモンスターらしい

別称は青熊獣せいゆうじゅうと呼ばれている

そのアオアシラの狩猟しりやうを頼まれたのだ

「どうしたの？ フォケ？」

リーガがフォケに話してきた

「実はな、狩猟依頼が来てな、今から行こうと思っているんだが、リーガは行くか？」

リーガは

「俺も暇だから行くよ、で？ どんな奴を狩りに？」

「アオアシラという熊のモンスターだ」

フォケはアオアシラの図鑑を見せた

青い背中にするどい爪だ

「恐ろしいな、でも俺もモンスターだし、慣れないとな」

リーガはリオレウスに慣れるためにも、クエストに行くことに

「それじゃあティガ！ブレラス！行くぞ！」

「うん♪」

「はいニャ！」

4人は溪流へ

……

ベースキャンプ
BC

ここ溪流は自然が豊かな場所であり、川などが流れている

そんな4人はベースキャンプで準備をしていた

「行くぞ！」

フォケを先頭に彼らは歩きだした

……

エリア5

「ほとんど食べ物が無いな」

「はちみつも取れないニャ」

「こっちには薬草はあるけど」

フォケ達はそれぞれのエリアをまわってみた

だがほとんど食べ物が食べられていた

アオアシラの仕業なのはわかったが

「特産タケノコだけはなぜか無事だけど」

エリア3のタケノコは無事だった

「だがそれ以外はほとんど食われているな……アオアシラってそんなに食う奴なのか……」

フォケは疑問に思ってしまう

「通常はハチミツを好む奴なのニャ」

ティガは色々と調べて、アオアシラの生態を言った

たしかに、熊なら魚やハチミツなどが主な食事だろう

「たしかキノコも食べるとかあったな」

「不思議だよな」

フォケも調べているのでわかっていて

リーガは不思議がっている

……

エリア6

「ここはたしか魚とかが取れるエリアだな……!?!」

フォケは足を止めた

「フォケ? どうしたんだ?」

後ろのリーガが言う

「いたぞ」

フォケ達から離れて見えるのは一匹の熊のようなモンスター

青い背中に鋭い爪、熊のような顔をしたモンスター、アオアシラだ

だがそのアオアシラは

「なんか……動いてないね」

動いてないのだ

「何が一体どうなってるんだ？」

フォケはアオアシラに近づく

「死んでるわけじゃないよな？」

リーガはそう言う

「傷はついていないみたいだ」

傷という外傷が見られなかった

じゃあなんで倒れているのか？

フォケはそのアオアシラに声をかける

「おい」

声をかけるがアオアシラはなぜか疲れた表情をしていた

「一体どうしたの？」

ブレラスが声をかける

すると

『は………』

「は……?」

一体何が言いたいのだろうか

『腹が……減った……』

ズザー――――

!!

全員がずっこけた

とりあえずフォケ達は竜車にその腹ペコのアオアシラを乗せて村へと戻った

……

『んが!ばく!んが!もぐ!』

連れてきたアオアシラはガツガツと食い物を食いまくっていた

「かなりの大食いね(汗)」

レイナは啞然とした

「俺もたしかに、これはありえないがな(汗)」

実はこのアオアシラ、あるモンスターが来て、恐れてしまいここまで来たのだ

しかも溪流の自分が通れるエリアの食い物系を食ったのだ

だが腹は満たされずにエリア6で倒れていたのだ

『ふう〜食った食った〜』

満足そうに膨れたお腹をポンポンと叩く

体はでかいがそれなりに体力と力はあるそうだ

『ありがとな、助かったぜ、まさかハンターとモンスターに助けられたようだな』

と、喜ぶアオアシラ

「はあ〜…」

フォケは呆れた

「それで結局どうしよう（汗）」

リーガがどうしようかと言う

たしかに、このまま狩るのもいいが

すると

『なあなあ？ここは食い物が豊富だろ？ならオイラをここに住まわせてくれ！』

と、アオアシラはお願いする

フォケは考えた

しばらくして

「いいだろう、ただしちゃんとこっちからのルールを守ってくれよ」

『ああ！ありがとな♪オイラはアシラ、よろしくな♪』

こうして、新たな仲間、アシラが仲間になった

これからどうなるのか？フォケのブリーダー^{ライフ}生活は

第10話 大食い熊（後書き）

はい、新しい仲間、アシラが加わりました

アシラ「オイラはアオアシラのアシラ、よろしくな♪」

えゝこの小説の第3の大食い野朗です（汗）ちなみにメタボです

アシラ「腹減ったよ作者、なんか食いもん」

おい（怒）

第11話 月下の雷狼竜（前書き）

今回はちょっとしたイベントになります、ではどうぞ

何処からか叫び声が聞こえた

フォケ「なんだ!？」

アシラ「ん?」

それは狼のような叫び声

するとアシラが

アシラ「あ…あ…」

アシラは固まってしまい、ハチミツを落としてしまう

フォケ「どうしたんだ?」

アシラ「うわあああああああああああああああああ
あああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

突然アシラは逃げていってしまった

フォケ「おい!どうしたんだ!おい!」

アシラは怖がりながら逃げた

フォケ「一体どうしたんだ?とりあえずハチミツをっ」と

フォケはアシラが落としたハチミツを拾ってポーチに入れた

フォケ「とりあえず叫び声になったところまで行くか」

フォケは叫び声が聞こえたエリアへと向かった

……

エリア5

そこに奴がいた

フォケ「!?!」

フォケはエリア5に入るとそこにいたのは一匹のモンスター

尻尾にはトゲが多く、青い体色に背中にはたくさんのトゲの突起が出ていて、額には日本の角に鋭い水色の目をしていた

フォケ「こいつは…」

フォケが出会ったモンスターだ

そう、このモンスターの名はジンオウガ

別名、らいおうちゅう雷狼竜だ…

フォケ「（アシラがあんなの驚いていたのは、こいつの叫び声を聞いたからだったのか…だからあいつは…）」

その時、ジンオウガがフォケの存在に気づいた

フォケ「(気づいたか!)」

フォケも武器を構えた

フォケが今手にしてる武器はユクモノ太刀だ

ジンオウガが迫ってきて来た

フォケ「くっ!」

フォケは咄嗟に突進をかわした

すると

フォケ「!?!」

刹那、ジンオウガは回転して尻尾で叩きつけてきた

フォケ「ぐっ!」

フォケはギリギリでかわした

フォケ「はっ!」

フォケは一振りして斬りつけた

しかし

カキーン!

「はじかれた！」

尻尾は硬いのかはじかれる

フオケは後退してジンオウガとの距離を置いた

「フオケ（厄介だな…これだけ強いとは…）」

すると

突然ジンオウガは背中から電気をためていく

周りの雷光虫がジンオウガの背中に集まる

フォケ「なんだ？雷光虫が背中に集まっていく」

すると

アオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオン！！

ジンオウガはほえた、それと同時にジンオウガの周りから大量の電気が流れる

近づいただけでしびれるようだ

「フオケ（電気をためたってことか?!）」

するとジンオウガはバツクアタツクをしてきた

フォケ「やばっ!？」

フォケは咄嗟にポーチからモドリ玉を取り出した

ボンッ!

緑の煙が流れてフォケを包み込んだ

煙が収まるとフォケの姿はなかった

そこにジンオウガのバックアタックが迫り、空をかく

ジンオウガは呆然としていたがすぐにほえてここから去っていった

……

フォケ「ふうく酷い目にあったな」

フォケはなんとか村へ戻って村長に報告した

村長の話ではどうやらアオアシラが溪流に現れたのはジンオウガが出たからという原因だった

だからアシラはここに来ていた、そして自分の住処がジンオウガに襲われたため、ここに逃げてきたのだが、自分より上の相手であるジンオウガに恐れて逃げてしまった

だからあいつは逃げたんだな

フォケはその後自分の家へ

……

フォケ「ただいま」

レイナ「あっ！お帰り！アシラがなんかビクビクして自分の部屋に入っていったけどどうしたの？」

リーガ「俺も気になったけどアシラどうしたんだ？」

どうやらアシラは先に帰っていたようだ

フォケ「実はな……」

フォケはこれまでの事を二人に話した

リーガ「なるほど……だからアシラ……」

レイナ「もう！情けないわね！こうなったらあたしが」

フォケ「待てレイナ、ここは俺に任せてくれ」

フォケがレイナをなだめる

なだめた後、アシラの部屋へ

……

アシラは一人、布団にもぐってブルブルと体を震わせる

怖い、あんな奴にかなわない、そんな思いが彼を臆病にさせた

格の違い、そして圧倒的な強さ、どれもこれもアシラの実力ではかなわない相手

すると

コンコン

アシラ「ヒッ！」

アシラは怖がりながらさらに布団にもぐりこんだ

フォケ「アシラ、フォケだ、入るぞ」

フォケは部屋へと入った

フォケの目の前には布団にもぐったまま出てこない一匹のアオアシラが怖がりながらフォケの顔を見る

フォケの表情は怒っているわけでもない、少しかたまった表情だ

すると

フォケ「怖かったんだな…何があったか知らないが、俺やみんながいる、怖いのはみんな一緒だ」

フォケはいつの間にかアシラの涙を拭いていた

その後アシラは泣き疲れて眠ってしまった

見てみるとなんだか寝顔がかわいい

フォケ「おやすみ」

そう静かに言ってフォケは部屋を出た

第11話 月下の雷狼竜（後書き）

脅威な感じで書きましたが

フォケ「まあアオアシラがここに来たのは、やっぱりジンオウガが原因だったんだな」

ゲームでもそれが原因だったので書かせてもらいました、そんな次回はアシラを強くするために、ある狩場へと行きます、そしてそこで新キャラの登場です。お楽しみに

第12話 雪のち新たな仲間（前書き）

フォケ「タイトルが変だぞ（汗）」

今回は新たな仲間加えるから変じゃないよ

アシラ「オイラ、先が不安だよ（汗）」

ブレラス「大丈夫♪僕もいるし」

元気だね君は（汗）

第12話 雪のち新たな仲間

それから数日後

あらかたフォケは依頼を片付け、次の依頼を受けることに

フォケ「今日はウルクススの依頼だ、ブレラス、アシラ、行くぞ」

アシラ「うん♪」

ブレラス「わーい♪」

アシラとブレラスが喜ぶ

アシラは子供っぽいがなんとか立ち上がっている

ブレラスはまだ子供で元気いっぱい

クルコ「とりあえずホットドリンクとかホットミート持っていてね」

クルコが二匹に忠告した

ブレラス「うん♪」

アシラ「ありがとう♪」

フォケ「ほら行くぞ」

フォケ達は凍土^{とうど}へ

……

凍土

極寒の地であるフィールドでかなり寒い

アシラ「ガタガタブルブル」

アシラは振るえている

元は熊のためか冬眠できるような環境だ

フォケ「無理すんなよ？」

アシラ「だ…だいじょ…ぶ…」

とりあえずホットミートを食って、寒さをやわらげる

準備ができたところでフォケは

フォケ「とりあえずエリア2に行くぞ、あそこらへんの可能性もあるからな」

ブレラス「そうだね♪」

ブレラスはなぜか寒いのは平気だった

聖炎龍（オリジナル）なのだから（汗）

アシラ「いいな〜ブレラスは〜」

アシラは羨ましくブレラスを見る

とりあえずエリア2へ

……

エリア2

フォケ「…いないな」

あまりモンスターはいないらしい

アシラ「どうしようか？」

ブレラス「もう少し奥まで行ってみようよ♪」

ブレラスはワクワクしているのか笑顔だ

フォケ「おいおい、あんまり行くなよ」

すると

フォケ「ん？何か聞こえるな」

何処からか

シャー…

すべる音が聞こえる

アシラ「あっ！フォケ！あれ！」

フォケ「！？」

フォケはアシラが向いた方向へ向く

すると誰かがこっちに向かって滑ってくる

白い体毛に長い耳のモンスター

あれが狩るターゲット、はくとじゅう白兔獣ウルクススだ

だがそれはこっちに向かってくる

フォケ「ちょっと待て！？こっちに向かってくるぞ！？」

アシラ「え？」

ブレラス「ホントだ」

するとその氷の崖からいきおいよくフォケ達に突進してくる

フォケ「あぶなっ！？」

フォケは避ける

だが

アシラ「う…うわっ!？」

アシラは慌ててしまい、ウルクススに激突してしまった

アシラ「ハラホレヒレ」

アシラとウルクススが大きなタンコブをつくりながら目を回していた

フォケ「おい、大丈夫か？」

フォケはアシラとウルクススに声をかけた

ウルクスス『いたた…あゝ頭が』

アシラ「痛い(泣)」

フォケ「ほら回復薬とかで回復するからな」

フォケはタンコブの部分に回復薬を塗る

飲むことも可能だがここはとりあえず塗ることに

数分後、二匹のタンコブもおさまった

ウルクスス『あゝオイラ気持ちよくすべったのにぶつかるなんて』

アシラ「こっちもだよ、ちゃんとよくみてくれよ」

なぜか会話がはずんでいた

フォケ「本当はウルクススの狩猟なんだけどな（汗）」

本来の目的がなぜかそうなってしまっている感じだ（汗）

ウルクスス『まあありがとう、そういえばオイラを狩りに来たの？』

フォケ「まあそうだが、とりあえず名前聞いていいか？」

フォケはとりあえずウルクススの名前を聞く

ウルクスス『オイラはウルクススのウルク、ここでいつも滑って遊んでいるんだ』

アシラ「そうなんだ、オイラと同じ獣牙種みたいだしね」

そう、ウルクススもアオアシラと同じ獣牙種に入っている

ウルク『オイラ、なんかここで遊ぶの飽きててね』

だがウルクもまだ子供っぽいが

フォケ「アシラ、お前いくつだ？」

フォケはアシラの年齢を聞く

アシラ「オイラ一応人間年齢で13ぐらいだよ」

ウルク『オイラは12』

なぜかウルクまで年齢を言う

フォケ「ある意味まだ子供って感じなんだな（汗）」

ブレラス「どうせだからウルク、君もフォケのところに来る？人は
いるけど遊べるところ言えばなんとかなるみたいだから」

すると

ウルク『ホント！』

ウルクは目をキラキラさせる

フォケ「しょうがない、まあ捕獲も入るからとりあえずはクリアっ
てことだな（汗）」

ウルク『じゃあよろしく！フォケ♪それとアシラ兄ちゃん♪』

アシラ「えっ!？」

アシラは兄ちゃんと呼ばれて驚く

ウルク『同じでも年齢がオイラと下だから』

アシラ「そうだね、よろしくなウルク♪」

フォケ「かわいい弟持ってよかったな（汗）」

こうしてウルクを新たに仲間になった

フォケ「後、とりあえずここで特訓でもする、まだ帰らないからな」

アシラ「えゝ!!」

フォケ「お前のためなんだよ、ジンオウガ相手だからな」

ウルク「面白そう! オイラも面白くなりそう♪」

ウルクは面白い⇨倒したいという意味で言ってるのか(汗)それとも遊びたいという子供心の気持ちでそう言っているのか(汗)

そんなこんなで凍土で特訓してから帰っていった

第12話 雪のち新たな仲間（後書き）

はいこちらも

ウルク「オイラはウルクススのウルク、よろしく」

一人称はアシラと同じですが性格も違います

アシラ「オイラに弟／＼／＼」↑嬉しくて赤くなる

赤くなってるアシラもかわいいよ、まあアオアシラは好きかな、それにアグナもだけど

フォケ「アグナはさすがに飼えないだろうな（汗）」

マグマだし（汗）

ブレラス「作者さん、次回は」

次回は特訓です

アシラ「えゝ!!」

えゝじゃないよ、ジンオウガ相手に逃げたのは誰よ！

アシラ「オイラですごめんなさい（泣）」

そうやるとあのヘタレ龍みたいになるよ

フォケ「あいつだな（汗）」

第13話 フォケの過去（前書き）

フォケ 「俺の過去か」

そう、今回はフォケの過去です

ではどうぞ

第13話 フォケの過去

フォケ「ふう〜なんとかなったな」

フォケはクエストが終わって家についていた

アシラ「ふう〜結構きつい」

ブレラス「もつとがんばらないと」

ウルク「あ〜面白かった♪」

リーガ「疲れた」

特訓をしていて疲れているリーガやアシラ

レイナ「もうだらしがないわね」

レイナにも言われる

アシラ「だって溪流を10周とか（泣）」

リーガ「ある意味鬼畜だぜ（泣）」

アシラとリーガは涙目

フォケ「まあここもなれてきたからなんとかなったな」

フオケは疲れた表情を一つもしていない

アシラ 「フオケって不思議だよね」

リーガ「なんか特殊って感じなんだよな」

アシラとリーガはフオケの事を不思議に思っていた

レイナ「そりゃあフオケは古龍の血をもっていて龍の血を持つ人間よ」

アシラ・リーガ「えっ!？」

アシラとリーガは驚く

ブレラス「そういえばフォケって不思議だよね？なんで僕達モンスターの言葉とかわかるんだろうと思ってたんだよね」

ブレラスはフォケについての疑問で頭をかしこまる

フオケ「ならちようどいいな、俺の事話すか……これは俺がまだ生まれた頃だけだな……」

フオケは自分の過去を話した

•
•
•
•
•
•

俺は生まれた時には村は焼かれていたんだ

[illegible]

俺は小さかったからわからずに泣いたんだ…

その後

『人間か…どうやら一人か…どれ私が育てるとするか…』

俺を拾ったのはモンスターだった

しかも古龍でかなり上のモンスターである祖龍ミラールツだったんだ

レイナ「それってミラじいの事？」

レイナがそう言う

フォケ「ああ」

……

俺はミラじいに育てられ、さらに古龍の血と他の飛竜の血を飲んで俺は竜人に近い人間となり、10歳で俺はコcott村の前でミラじいと別れたんだ…ミラじいは人間の姿でな、その後俺はコcottの英雄である村長に育てられ、12歳でハンターになり…

そして6年後、俺はコcottからドンドルマへとやってきて、ギルドナイトになったんだがな

リーガ「だが？」

フォケ「その後俺には合わないということをやめた」

アシラ「えっ!？」

レイナ「その時はあたしにも合ってなかったしね」

フォケ「続き話すぞ？」

……

その後俺はハンターとして狩猟チーム、ドラゴニックのリーダーになった

俺は仲間と共に狩りをして楽しかった…だが俺はなぜかモンスターの声を聞いたんだ

そして思った

モンスターにはいい奴や悪い奴はいる、それでもモンスターの気持ちというのもわかったほうがいい…俺はそう思い、チームを解散してドンドルマでソロで狩りをしてモンスターとの親交など色々したが、中々応じてはくれなかった、だがそんなある日

フォケ「大長老、何か御用ですか」

俺はドンドルマを納める大長老に呼ばれた

大長老「ホホウ、お前さんに頼みがあってな、お前さんはモンスターの声が聞こえるとおっしゃってたな」

フォケ「はい…」

俺はそう答えた

大長老「そこでだがお前さんには王宮書士隊の隊長をやってもらいたいのだ、お前さんがモンスターを理解する第1人者じゃ、お前さんにモンスターを飼うことを許可をする、お前さんがモンスター達の事をこの世界で認めてもらえるよう、お前さんにやってもらいたい、どうじゃ？」

俺はその言葉に歓喜した

これはもってのほかだ

フォケ「はい！ぜひお願いします！」

こうして俺は王宮書士隊の隊長として、モンスターの生態などを見るブリーダーハンターになった

俺は早速拠点をポツケ村に移した

その途中でティガレックスにやられたな

あの時は痛かったしな

レイナ「そしてあたしは、密猟者のハンターによってあたしの両親は殺されたわ、でもあの時フォケがあたしを拾ったの」

リーガ「それでなんだ」

クルコ「まあ僕も色々と話してたらいつの間にかフォケと一緒にだっ

たけどね」

クルコが入ってきた

フォケ「クルコ」

クルコ「僕のサポートがないといけないし、それにフォケは優しいから言葉もわかる、そして言葉も教えてくれたしね」

アシラ「オイラもなんとなくしゃべるようになったし」

ウルク「うん、オイラもここにいて言葉をがんばって覚えてたら自然としゃべるようになったし」

そう、フォケは一人じゃない、もっともモンスター達はそんなフォケを親しんでいる

アシラ「すごいな」フォケは「

ググウ」

何処からか何かがなった

アシラ「なんかオイラお腹すいてきたな」

フォケ「アシラは食いしん坊だな、それじゃあもう夕食にするか」

アシラ「賛成!!」

リーガ「そうだな、フォケの事もっと知れてよかった」

ウルク「オイラもお腹すいた」

クルコ「それじゃあ作ろう」

ブレラス「火は僕がやるよ♪」

みんな仲良く夕食を作ることに

フォケ「（ミラじい：俺はがんばってるよ：あんたのおかげだ：あんたはもう死んでしまったけど俺はあんたの育ての親だ：こっちでもがんばるからな）」

フォケは今はもういないミラルーツの事を思う

……

2年前

古塔

ミラじい「久しぶりだなフォケよ」

フォケ「久しぶりだなミラじい」

古塔の最上階でフォケは育ての親であるミラじいと会っていた

ミラじい「わしももう長くはない：お前さんにわしの体である鱗^{うろこ}な
どを剥ぎ取るがいい」

フォケ「待ってくれ！？俺は！」

ミラじい「わしはもうじき死ぬ…最後にお前さんに会えて…本当に…よかった…」

ミラじいは弱々しい声で最後の言葉を残し、死んでしまった

フォケ「ミラじい……」

フォケの目には涙が出てきた

そしてフォケはミラじいの一部の鱗を剥ぎ取った

……

フォケの部屋

フォケ「あんたの鱗は…お守りにしてるぜ…見守ってくれよな…」

フォケの首のアクセサリには、白い神秘的な鱗があった

第13話 フォケの過去（後書き）

グダグダな過去になってしまった（汗）

フォケ「しっかりしてくれよ（汗）」

ごめん（汗）次回は新たな仲間登場です

第14話 燃える魔球？

燃え上がるマグマ

そしてこの暑さ

ここは火山

アシラ「あちゅい」

アシラは汗をだらだらかく

リーガ「俺は平気だけどな」

フォケ「俺だって熱いんだ（汗）とりあえずクーラードリンクでも飲んでろ」

ここではクーラードリンクなどが必要だ

寒いのは熱い

アシラ「あゝオイラ、青熊獣の焼肉になっちゃうのかな」

フォケ「そこで食い物を連想すんな（汗）」

アシラの好奇心的な妄想にフォケはつつこんだ

ブレラス「熱くていいね」

ブレラスは元気だ

アシラ「ブレラスはいいよな〜ここでも元気だし」

リーガ「環境的にもいいんじゃないか？」

フォケ「まあ寒いのは炎などで暖まるしな（汗）」

そんなこんなで今回の依頼は赤甲獣^{せきこうじゅう}ラングロドラの狩猟だ

……

火山エリア5

そこに奴がいた

赤い甲殻をまもっていて、長い舌を伸ばして甲虫種^{こうちゅうしゅ}のブナハブラを食った

赤甲獣ラングロドラだ

フォケ「よし！行くぞ！」

フォケは後ろから太刀を一振りした

すると

ラングロドラ「ぎゃっ！」

後ろをつかれて驚くラングロドラ

そこに

アシラ「覚悟おおおおおおおおおおお！
」

アシラが爪でラングロドラをひっかく

ラングロドラ『そうはいくか!!』

と、ラングロドラは丸くなった

カキーン！

アシラ「あああああああああああああああああ！！
爪があああああああああああああああ！！」

アシラは爪を痛くしてパニックった

フォケ「何やってんだか（汗）」

するとラングロドラは転がってフォケに向かっていく

リーガ「危ない！」

しかし

フォケ「ほっ！」

フォケは太刀を振り回して右へと避ける

すると、ラングロドラに太刀が当たって

ラングロドラ『うわっ!』

ラングロドラはひっくり返ってそのまま倒れてしまった

フォケ「これで隙ができたな」

フォケは構える

ラングロドラ『うう…この俺の魔球が完全にやられるとは』

フォケ・リーガ「は？」

ラングロドラの言葉にフォケとリーガは哑然とする

フォケ「魔球っておい（汗）」

ラングロドラ『俺の負けだ…俺は負けたんだ（泣）』

なぜか泣くラングロドラ

フォケ「おいおい泣くなよ（汗）」

フォケは言うが

ラングロドラ『うるせえ! いままで俺の魔球は完璧だったんだぞ! どうしてくれるんだ!!（怒）』

フォケ「いやどうしてくれるじゃなくて、隙ありすぎだろ（汗）」

その言葉にラングロドラは

ラングロドラ『なんだと!! なら俺のこれを食らえ!』

ラングロドラの体から茶色いガスが少し漏れる

フォケ「まさか…」

ラングロドラ「食らえ!!」

するとラングロドラの周りから茶色いガスが発生した

リーガ「くせえゝ（泣）」

リーガは右翼で鼻をおさえながら左翼でガスをバサバサとラングロドラに向けてうちわのようにあおぐ

アシラ「くぁwせdrftgyふじこ」

アシラは匂いでダウンし、口から泡を吹いていた

フォケ「ほいと!」

フォケは薄い水色の物を地面に向けて投げた

すると薄い水色の煙が出てきた

リーガ「いいニオイだな」

これは消臭玉というアイテムで、このようにガスによってアイテムが使えない時に使えばニオイも消える

ラングロドラ『ガーン!!』

ラングロドラはショックを受けた

フォケ「ショック受けるなよ」

ラングロドラ『うるさいやい! (泣) 俺だって強いのに (泣)』

しくしくと泣くラングロドラ、フォケはラングロドラに駆け寄る

フォケ「とりあえず…俺のどこで来るか?」

フォケはそう言う

ラングロドラ『俺が? お前のどこに? …でもお前ハンターだよな?』

たしかにフォケはハンターだが

フォケ「一応モンスターの事を飼っているブリーダーハンターだ」

ラングロドラ『ブリーダーハンター? …そういえばリオレウスとかここに生息していないアオアシラもいるし…そうだな、なら俺も新しい魔球の修行をするためにお前のところに行く! 俺も連れて行ってくれ!』

と、ラングロドラは仲間になりたいという

フォケ「わかった、そういえばお前名前とかはないよな？」

ラングロドラ『ああ、俺の名はランドラっていうんだ』

ラングロドラ、ランドラは言う

フォケ「それじゃあこれでクエストクリアだな」

フォケ達はとりあえずクエストクリアした

……

帰ってきた後

アシラ「あゝあのニオイはオイラにはトラウマだゝ（泣）」

ランドラ『ごめん（汗）』

ランドラはアシラに謝る

ウルク「オイラも行ったかったけど、熱いのはやだなゝ」

ウルクにとっては熱い場所は嫌なのだ

環境によって弱点がわかるモンスターもいる

ウルクススなどは凍土に住んでいるためか寒いのは大丈夫だが逆に熱いのは苦手だ

そんな時

フォケ「帰ったぞ」

フォケが帰ってきた

レイラ「お帰り」

リーガ「どうしたんだ？　なんか深刻な顔しているが？」

フォケは深刻な顔をしていた、なぜかというと

フォケ「ついに奴が来たんだ…」

奴

それは一体

アシラ「まさか…」

フォケ「ああ…ついにあいつの狩猟に挑戦だ…ジンオウガのな」

あたりが静まってきた

第14話 燃える魔球？（後書き）

ランドラ「俺はラングロドラのランドラだ！よろしくな！」

獣牙種3匹になりました

フォケ「たしかにな（汗）」

そして次回はついにジンオウガとの対決です

アシラ「オイラ、絶対に…」↑震えている

はたしてどうなるのか！

第15話 無双の狩人前編 月が照らす溪流 (前書き)

はい！ついにジンオウガです

アシラ「ついに！」

フォケ「けど負けれないな」

うん、さてどうなるかそれでは第15話をどうぞ

第15話 無双の狩人前編 月が照らす溪流

ここは溪流

ベースキャンプ

フォケ「とりあえず準備OKだな」

フォケの装備はアシラシリーズ、そして武器はしなやかな刀身で持ち手には水晶のようなものがういている、凍刀という

アシラ「うう……」

アシラは震えている、かなり緊張しているようだ

リーガ「アシラ、大丈夫だ！俺もなんだし自信持とうぜ！」

リーガがそんなアシラを励ます

アシラ「リーガ…（泣）」

アシラの目から涙が出る

ブレラス「ファイトだよ♪」

ブレラスが笑顔でアシラを励ます

フォケ「よしっ！準備はいいか？」

アシラ「うん！オイラ！がんばるよ！！」

「俺も大丈夫だ！」

ブレラス 「気合入れていこう♪」

みんな気合十分だ

フオケ「行くぞ」

フオケ達は歩き出した

•
•
•
•
•
•

溪流エリア7

雷光虫がうゆうゆと空をただよう、すると雷光虫は何処かへと引き込まれるように向かう、その向かう場所は…雷が帯びたあのモンスターの背中

たくましい角、背中にはトゲの突起がいくつも出ていて、水色の鱗がびっしりとついている

雷狼竜ジンオウガ

ジンオウガの背中から雷光虫が集まって、彼の電気となる

そしてそれが極限になり

Aoooooooooooooooooooooooooooo

オオオオオン!!!!!!!!!!

ジンオウガが咆哮し、周りから電気が流れ出す

それを見ていたフォケ達はすぐに構える

ジンオウガはフォケ達に気づいて咆哮する

フォケ「行くぞ！」

フォケはペイントボールを投げてジンオウガに当てる

ジンオウガにピンクのものが当たる

ペイントボールはモンスターを見失わないようにニオイなどで相手が何処にいるのかがわかるアイテムだ

するとジンオウガはニオイが嫌で何度も咆哮する

フォケ「はああああああああああああああっ!!」

フォケはジンオウガの尻尾に大きく振りかぶって叩きつけるように斬り付けた

バシン！と太刀ははじかれる

フォケ「硬いなやっぱ」

フォケは改めてジンオウガのすごさを感じた

電気やられだ

リーガ「火炎弾！！」

リーガはすかさず火炎弾をジンオウガに向けて吐く

それがジンオウガの肩などにあたり、ジンオウガはひるんだ

すると背中の中の電気が少し出ていく

フォケ「ひるませればこっちのものだな」

フォケはそれを見破り、ジンオウガに気刃斬りで尻尾などを斬りつける

ジンオウガ『ぐおっ！？ なんとという強さだ』

ジンオウガの声が聞こえるフォケ達はジンオウガの声を聞いた

ジンオウガ『やるようだな、だが私はそう簡単には倒せん！！』

ジンオウガの背中がバチバチと火花を散らした

そしてジンオウガは咆哮した

咄嗟にフォケ達は耳をふさいだ

これこそジンオウガの帯電状態での怒り状態だ

帯電状態の間はスタミナは減らないゆえにスタミナなど気にしない

のだ

ジンオウガというモンスターはこの帯電状態があるかぎり、無双で
きるのだ

それが、無双の狩人というものだ

フォケ「さて…俺も本気で行かせてもらうか！」

フォケは太刀を構える

ジンオウガ『奴よりはやるようだな…だが私は奴を倒さなければならん！！ここにくたばるわけにはいかないのだ！！悪いが…勝たせてもらうぞ！！』

ジンオウガがフォケに迫る

月が彼らの戦いを照らし出す

第15話 無双の狩人前編く月が照らす溪流く（後書き）

次回は後編です

フォケ「あのジンオウガ…何か理由ありそうだな」

その理由とは、そして…

第16話 無双の狩人後編く託された命く（前書き）

はい！ついに決着です、この話から残酷表現にいたします。理由はやっぱモンハンらしい感じにしたいのでそうします。ではどうぞ！

第16話 無双の狩人後編（託された命）

フォケ「はあ…はあ…」

ジンオウガ『くっ…私とここまでやるとはな…何者なんだ…人間なのに私の言葉がわかり、それにこの強さ…貴様は人間なのに何者なんだ…』

互いに息が上がっていた、フォケの防具には返り血だろう、血がついていた

ジンオウガはすでにボロボロだった

尻尾は斬られ、さらに角までも折れていた、傷跡には少しだけ血が出ていた

アシラ「はあ…はあ…」

アシラも同様にボロボロだった

爪はほぼボロボロで傷跡も生々しく残っていた

フォケ「俺は人間だ…なぜモンスターの言葉が話せるかだが…俺には古龍の血が入っていてな…その影響だろうな…」

フォケは疲れた表情をしながら話す

ジンオウガ『そうか…だが私も負けるわけにはいかないんでな…決

着をつけてやろう…そのアオアシラとリオレウスと白いモンスターと共にな…』

アシラ「オイラだって…伊達に特訓したわけじゃない…でも…オイラは弱かった…でもこのハンターであるフォケがいたからオイラは…」

アシラは最初、ジンオウガにおびえていた…しかしフォケが色々の特訓やらなにやらしてくれたおかげで、少しおびえはあるがそれでも立ち向かう

リーガ「俺は元は人間だった…でも俺は絶対に負けないからな！」

リーガが叫ぶ

ブレラス「僕はめずらしい古龍だけど…それでもフォケのそばにいることが僕の使命だから！」

ブレラスの炎の翼がさらに燃える

ジンオウガ『なら…食らえ！』

ジンオウガは上空で飛んで一気に倒すつもりだ

フォケ「リーガ！」

リーガは咄嗟にフォケの元に低空飛行でフォケを掴んでジンオウガの攻撃を避ける

ジンオウガは起き上がれなくなりじたばたする

フォケ「食らえ!!」

リーガはフォケをジンオウガに向けて投げ飛ばした、フォケはそこから太刀を突き出した

ザシュッ!

決着はついた

ジンオウガの胸辺りで突き刺した太刀があった

フォケはその反動で倒れていたがなんとか起き上がった

ジンオウガ『…見事…だ…私の…負けだ…』

ジンオウガはもはや虫の息だった

アシラ「勝った…」

アシラやみんなが呆然とする

ジンオウガ『私は…いい相手と戦ってよかった…だが忘れるな…さらに上の者までいる…そして私は対峙したかった…あの龍を…もう私は死ぬだろう…』

ジンオウガは苦しみながらも言葉を放つ

フォケ「ジンオウガ…」

ジンオウガ『なら…貴様に…卵を…預けよう…滝のある場所に…私
と…同じ…ジンオウガの…卵…私は♂だが…卵を預かっている…私
の息子だ…それを貴様に…預ける…グフツ…もう私も限界だな…あ
の龍だけは…気をつけ…ろ……』

ジンオウガの背中の電気は粒子のように散り、ジンオウガは倒れた

フォケ「ああ…あんたと戦えて…よかった…」

リーガ「やったな…」

ブレラス「滝に行こう…」

みんなは頷いた、フォケはジンオウガの体から鱗などを剥ぎ取って
からエリア6へ

……

エリア6

フォケ「ん？これは」

探していたら、草陰の所に黄色と水色をした卵があった

すると

パキパキ…

フォケ「産まれる!？」

アシラ「え!?!」

リーガ「ついに!?!」

ブレラス「楽しみ♪」

パキーン!!

卵が孵って産まれたのは

????? 「キュゥウン」

小さいジンオウガだ

フォケ「ジンオウガ…あんたの子…大事に育てるからな…」

フォケは幼いジンオウガを抱いてユクモ村へと戻った

エリア7には、ジンオウガの鱗が供えられていた

天国から、産まれた子を見守って…

第16話 無双の狩人後編く託された命く（後書き）

はい！決着がつけました！

フォケ「なんとかなってよかった」

子ジンオウガ「キュウーン…」

さて、次回は…このジンオウガの名前とそして英雄の祭になります

アシラ「それって？」

リーガ「お祭りか？」

うん、ジンオウガを倒した後に出るあれをね

第17話 英雄の祭1（始まりの準備）（前書き）

フォケ「なんだ？このタイトル」

はい！英雄の祭だよ、ジンオウガを倒した後で出てくるPVのだけど、今回はその英雄の祭をやっちゃいます！

リーガ「ずいぶん感じたな」

ブレラス「わーい！お祭だ〜♪」

そんな今回は序盤です。では第17話をどうぞ

第17話 英雄の祭1（始まりの準備）

ジンオウガを倒して1週間となった

ここユクモ村はジンオウガを倒したおかげでここに来る客なども多くなった、そこで

フォケ「英雄の祭？」

ユクモ村長「はい♪あなたがジンオウガを倒したおかげでユクモ村に来る方も多くなってきました、そこでユクモ村で英雄の祭を開催したいと思っています。そういえばフォケさん、あの子供ジンオウガは？」

フォケ「ジングですか…ジングは大切に俺が責任を持って育てています。色々すみません…」

フォケは謝るが

ユクモ村長「まああなたらしいですし…それに害がないのですからあなたのそばにいれば大丈夫でしょう、それにあなたは村を守ってくれたのですから…あなたのモンスターもです♪」

笑顔で村長は言う

フォケ「そうですか…」

ユクモ村長「今回は他の村に招待状を出しておきました。コcott

村やドンドルマ、それにジャンボ村やあなたが前にいたポケ村やモカの村などに招待状を出しましたし、そのうちここに来ると思います」

どうやら他の村に招待状を出したようだ、ユクモ村の英雄の祭に

ユクモ村長「それにどうせなので体を休まれてはいかがですかフォケさん」

フォケ「ありがとうございます」

フォケはおじぎした

ユクモ村長「フフフ♪ではこちらは準備がありますので失礼」

ユクモ村長は打ち合わせで去った

フォケ「俺も家に帰るか」

フォケは家に帰った

……

レイナ「英雄の祭？」

フォケ「ああ」

フォケは早速みんなを集めて話し合いをしていた

リーガ「お祭か」

アシラ「食い物とか売ってるよね？」

ウルク「アシラ兄ちゃん、たしかお祭で屋台あるよ♪」

アシラ「マジ！？オイラ…」

アシラはよだれをたらす

レイナ「よだれたらさないでよ！（怒）」

アシラ「ごめん（汗）」

レイナが一喝した

クルコ「まあお祭の事は事前に僕と宅配のアイルーとかで知らせたしね」

宅配のアイルーとはかさをかぶっている黒いアイルーのことだ

ティガ「とりあえずお祭を楽しみましょうニヤ」

ランドラ「それもそうだな、面白い屋台とかあったら俺もやろうかな」

ティガとランドラも楽しみのようだ

ブレラス「お祭〜♪」

ブレラスも楽しみのようだ

ジンガ「きゅーくん♪」

ジンガも楽しみのようだった、まだ子供だが子供なら絶対楽しみたい感じた

フォケ「そうだな、お祭は明日のようだ、後は手伝いとかするか」

全員『おー!!』

全員はお祭の準備をして明日に備えた

第17話 英雄の祭1（始まりの準備）（後書き）

英雄の祭編です

フォケ「どうなるかな」

面白くしようかどうか…それとどうせだから英雄の祭に参加したい
方募集します！

メッセージまたはここの感想などで

第18話 英雄の祭2（準備）（前書き）

あゝなんだかな

フォケ「作者、お前大丈夫なのかよ（汗）」

とりあえずはね…今回は短いかな…

アシラ「そんじゃあ第18話どうぞ！」

第18話 英雄の祭2（準備）

ユクモ村はお祭の準備でにぎわっていた

それぞれ観光客などがぞろぞろとユクモ村へと入っていく

それぞれの村や町などの集会所の受付嬢の人達も来ている

そんなフォケ達は

フォケ「とりあえずはなんとかなったな」

フォケの家前ではお店が開いていた

それぞれハチミツなど色んな物が売っていた

だがアシラはよだれをたらしていた

リーガ「アシラ…」

リーガは疑わしい目でアシラを見る

アシラ「うっ…ごめん」

ウルク「売り物だから買って食べないと♪」

まさにそのとおりだ

レイナ「とりあえずがんばりましょう」

そんな英雄の祭が始まろうとしている

そんなフォケは

……

ここは溪流

ジンガ「きゅうん…」

フォケ「お前の父さんはきっと天国でお前の成長を見ているさ…ごめん…ジンガ」

ここはそんなジンオウガのお墓の前だ

溪流のユクモ村近くにジンオウガの亡骸は眠っている

ジンガ「きゅうん…」

ジンガは少し悲しい目でフォケに甘えるようにだきついた

フォケも涙を流しながらジンガを抱きつく

フォケ「でも…俺はそんな命を無駄にしない…お前はまだ子供だけ
どそれでも俺と一緒にいいんだな」

ジンガ「きゅうん…」

ジンはそんなフォケを受け入れてくれた

フォケ「もう涙流すのはおしまいだな…それじゃあ村でお祭を楽しもうか」

ジンガ「きゅーん!!」

ジンは喜ぶように吠えた

それぞれの思いは心の中にある

受け入れる者も受け入れない者もいる

でも命は受け継がれる

親から子へ

そんな彼等の先を

終わりと始まりを

第18話 英雄の祭2（準備）（後書き）

シリアス的になりましたが次回から本格的に英雄の祭が始まります

第19話 英雄の祭3（始まり）（前書き）

フォケ「遅いぞ作者」

すまない（汗）

アシラ「オイラ待ちくたびれたんだぜ」↑すでにヨダレが（汗）

わかったからやめい！？それでは久しぶりの第19話をどうぞ！

第19話 英雄の祭3（始まり）

ユクモ村の門に二人の男女がいた。

一人は左手にバラのタトゥーをしている男、もう一人はピンクの服にクリーム色の髪で内巻きカールのロングヘアーをしている少女だ

少女「お祭り楽しみ〜♪」

男「おいおいリリー、あまりはしゃぐと離れちまうよ」

と、男は少女：リリーにそう言う

二人はユクモ村へと入っていった

……

一方フォケ達は

アシラ「よっしゃあ！！お祭りだあ〜い！！」

バカな青熊が一匹屋台をまわる（特に食物には）

ウルク「オイラもまわろ〜っ」と♪

ウルクも屋台をまわる

クルコ「いらっしゃ〜い！！ようこそ！ユクモ村へ〜♪」

クルコは客を歓迎するメロディーを鳴らす、クルコのラツパのような音がユクモ村中に響いた。これには来た客は驚いたがユクモ村長の説得によりなんとかパニックにはならなかった

レイナ「まったく男共はこう祭りとなるとなんではしゃぐのかしら」

レイナは呆れた表情をする

リーガ「でもいいんじゃないか？　こうしてゆったりするのよ」

リーガがレイナを慰める

……

そして夜

番台のアイルーが扇を開き、太鼓の音になり、英雄の祭が始まった

第19話 英雄の祭3〜始まり〜（後書き）

今回はコラボとしてmyu-myuさんのキャラ、リリーちゃんとがばねをゲストに英雄の祭を行います

遅くなってすみませんmyu-myuさん（汗）

次回は英雄の祭4です。ここでアシラに変化が

アシラ「何が!？」

第20話 英雄の祭〜終〜（前書き）

はい！英雄の祭もこの話で終了です。

フォケ「の割に作者はアルバ討伐してエスカドラシリーズを完成させて今度は自分自身で大剣とガンランスを使える訓練とかで、作者もなんかな〜」

だって使いこなせるには何事も経験だし…大剣はいいせんいつてるけど…ガンランスもなれてきたかな

フォケ「それは頼もしいな」

さて、こんな話してる場合じゃない、第20話

フォケ「見てくれよ」

第20話 英雄の祭〜終〜

英雄の祭が始まった、番台のアイルーが踊り、同時に他のアイルー達が踊る

おめん屋にチャチャがやってきて、お面を変える、そして同時にフオケ達も来た

アシラ「お面がある！ん？店員さ〜ん、これ何のお面？」

アシラはかっこいい赤いお面を店員さんに見せる

店員「あ〜それは戦隊のリーダーのお面だ、かっこいい男はこういう憧れをいだいているんだ」

アシラ「へえ〜」

アシラは納得する。アシラはそのお面を購入した…これが後にアシラなどにとある影響を受けようとは…

フオケ「まあ気に入ってくれているなら俺は納得するが…でもなんで戦隊ものなんだ？（汗）」

フオケはそこにツツコミを入れた

……

村のみんなが踊りだす、それぞれの町や村の受付嬢が屋台の食物や

飲み物を配ったり、中には踊りに参加する受付嬢もいた。キッチン
アイルー達が腕によりをかけて料理を作る：金魚すくいの方では美
容師の姿のアイルーが金魚すくいの凄技を見せる、勢いよく金魚と
いうか魚達が宙に浮く

射的の方ではとある男が連発して商品を次々とゲットしていく：ユ
クモ村長は同じ竜人族であるポケ集会所の姉さんと愉快に酒を飲
んでいる。フォケ達も踊りを踊っていて楽しそうだった

ジンガ「ガウ：」

フォケ「ジンガも緊張してるのか：よしよし」

フォケはジンガの面倒を見ながら踊る、アシラは戦隊レッドのお面
をかけて踊り、他のみんなも踊る：すると集会所の石階段から数匹
のアイルー達が巨大ダルマをもって降りてくる、その巨大ダルマの
上にはニャン次郎がのっている。バランスよくのっているが：その
時バランスを崩して巨大ダルマが転がりニャン次郎は落ちないよう
に走る：巨大ダルマの上で：もはや玉ころがしだった、それを横か
ら通っていき他のみんなは驚いて踊りを中断、巨大ダルマはフォケ
の家の前にある温泉に転がり止まった

フォケ「すげえサプライズだな（汗）」

レイナ「あらら（汗）」

アシラ「腹減った」

ウルク「わあゝすごゝい♪」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

花火は上がってトレニャーは…この先はみなさんのご想像にお任せします。

こうして英雄の祭は終わった…しかしまだ物語は終わったわけではない…彼等のハンターライフはまだまだ続く…

第20話 英雄の祭〜終〜（後書き）

はい！今回コラボしてくれたmyu—myuさん、ありがとうございます

フォケ「色々あったな」

まあそれなりかな？さて次回は…アシラと他が！

フォケ「何がだよ（汗）」

第21話 結成！モンレンジャー（4人）（前書き）

フォケ「なんだこのタイトルは（汗）」

戦隊ものとかちょっとやってみようと思って

フォケ「逆に不安だが（汗）」

そんな第21話

フォケ「おい！？」

第21話 結成！モンレンジャー（4人）

アシラ「〜♪」

アシラは鼻の下を伸ばしながら何かを見ていた

フォケ「あいつ一体どうしたんだ（汗）」

レイナ「あたしも知らないわよ（汗）」

リーガ「なんか最近お面の屋台で買った戦隊モノのお面を見て興奮してたしな」

リーガが説明のように言う

アシラはこう考えた

かっこいい戦隊のをやりたいと、アシラはフォケのもとに向かい話をした

フォケ「戦隊をやりたいだど？」

アシラ「オイラあのお面買ってかっこよかったからオイラやりたいんだ、ねえいいだろ〜」

ゆさゆさとフォケを揺らす

フォケ「わかった！わかったから揺らさないでくれ（汗）」

アシラははっとし、揺らすのをやめた

リーガ「で？ 具体的にはどうしたいんだ？」

リーガの言葉にアシラは戸惑う

レイナ「考えてないのね（汗）」

レイナは呆れた表情をする。それでもアシラは

アシラ「オイラ、モンスターでも何か役に立ちたいんだ、ならこれしかないと思って」

アシラは頭をボリボリとかく

フォケ「それはいいがあまり邪魔とかしないでくれよな？ そうなったら俺に責任がくる。迷惑だけはするなよ」

フォケはきつくアシラに忠告した

アシラ「うん！」

アシラは頷いた、まずはメンバー集めをすることにした：しかし

アシラ「やられた」（泣）」

アシラはボロボロのまま帰ってきた

フォケ「お前どうしたんだ!？」

フォケは救急箱を取り出してばんそうこうをアシラにつける

アシラ「メンバー集めてたけどみんなオイラを攻撃して（泣）」

レイナ「あんたね（汗）普通野生のモンスターにスカウトしてどうすんのよ（汗）」

たしかにモンスターは凶暴のためとか人間であるフォケがいるところに行けと言ったらやられるのがオチだ…もう遅いが（汗）

リーガ「はあ…しょうがないな…それじゃあ俺がメンバーになるからそれでいいだろ？」

アシラ「リッガァ（泣）」

アシラは涙と鼻水ボロボロでリーガに抱きつく

リーガ「おまつ！？抱きつくなマジ！？」

リーガは慌てる

レイナ「バカっぽい」

レイナが呆れる

フォケ「よかったなアシラ（汗）」

フォケは苦笑しタジタジになりながらアシラに言う、すると今度は

ウルク「アシラ兄ちゃん！オイラも加えて〜！」

ブレラス「僕も〜♪」

お子様モンスター二人が乱入

フォケ「なんでお前らまで（汗）」

レイナ「もう呆れたとしかいいようがないわ（汗）」

フォケはタジタジ、レイナはさらに呆れた

ジンガ「ガウ？」

ジンガは首をかしげる

アシラ「というわけで早速！」

アシラ達は部屋に閉じこもり戦隊会議をした

フォケ「俺はジンガにミルク与えてくる」

ジンガ「ガウ♪」

ジンガは嬉しそうにフォケの頭の上に乗る

レイナ「あたしは空中散歩に行ってくるわ（汗）」

レイナは外へと出て飛びだった

……

数時間後

アシラ「モンレッド！」

リーガ「モンブルー！」

ブレラス「モンホワイト！」

ウルク「モンピンク！」

4人の影がスポットライトを照らす（スポットライトはつつこまな
い方向で）

4人『モンハン戦隊モンレンジャー！！』

4人の背後から爆発が起こる、アシラはレウスシリーズ（モンスター
用）を着て、リーガはなぜか青いマントを首につけている。ブレ
ラスはウルクシリーズ（子供用）を着て、ウルクはジャギィシリー
ズ（モンスター用）を着ていた

フォケ「（こいつら大丈夫なのか（汗））」

フォケは不安になった…次回！モンレンジャー出動！！

第21話 結成！モンレンジャー（4人）（後書き）

フォケ「まさか狩りでもこの格好でか（汗）リーガだけはマントだが（汗）」

いやゝあまりにもどうしようと思いき青いマントだけにした

リーガ「意味ねえ！！」

さて、次回出動です

フォケ「嫌な予感しかしねえ（汗）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7302j/>

モンスターハンター～ブリーダーハンターとモンスター達の生活～

2011年11月1日00時04分発行